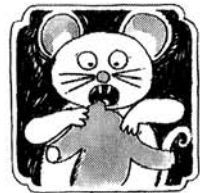


ネズミのかじった服



むかし、インドの王舎城おうしゃじょうのちかくに、一人の男がすんでいました。

気のいい男でしたが、たいへん迷信めいしんぶかく、すこしでもかわったことがあると、すぐにそのことをとりあげて、

「これは、良いことよのしるしだ。」
とか、

「これは、悪いことわるのしるしだ。」
と、いいはじめるのでした。

ある日のことです。

男は、すこし用事があって、となりの町へでかけることになりました。そこで、大切にしまっておいた、あたらしい服をとりだして、着ようとしてきました。ところが、その服をひろげたとたん、男は、ぎよつとして顔いろをかえました。

大切にしまっておいた服が、ネズミにかじられて、あちこちやぶれているではありませんか。

「うーん、これは……。」

男は、うなりました。

うなりながら、ネズミにかじられた服を、じっとみつめました。

みつめればみつめるほど、これはたいへんなことだと、おもいました。

——これは良いことよのしるしだろうか、それとも、悪いことわるのしるしだろうか……。

ネズミのかじったあなを、目をさらのようにしながらながめました。

下からながめたり、上からながめたり、右からながめたり、左からながめたり、いろいろながめましたが、ながめればながめるほど、男の顔はだんだんと、くもつてきました。

——うーん、これはたいへんだ。この穴あなのあきようは、どうながめても悪いことわるのしるし